

Bernstein 型問題の研究の最近の進展について

川上 裕 (Yu KAWAKAMI)

金沢大学理工研究域数物科学系

2021 年 7 月 9 日 : 東京理科大学工学部数学科談話会

本講演の目的

グラフ曲面の Bernstein 型問題の最近の研究結果の紹介

- ① \mathbf{R}^3 の極小グラフに対する Bernstein の定理の歴史
- ② \mathbf{R}^3 の平均曲率一定 (CMC) グラフに対する Bernstein 型定理
- ③ \mathbf{L}^3 のグラフ曲面に対する Bernstein 型定理について

1. \mathbf{R}^3 の極小グラフに対する Bernstein の定理の歴史

$\Omega \subset \mathbf{R}^2$ 領域

$X: \Omega \rightarrow \mathbf{R}^n$ C^r 級はめ込み ($r \geq 2$)

Definition

曲面 $X(\Omega)$ の平均曲率が恒等的に 0 となるとき、その曲面を **極小曲面** (minimal surface) と呼ぶ。

非径数表示 (non-parametric form)

$$X(x, y) = (x, y, f_3(x, y), \dots, f_n(x, y)), \quad f_k(x, y) \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$$

のとき、この曲面が極小曲面であるための条件は次のようになる：

$$\left(1 + \sum_{r=3}^n \left(\frac{\partial f_r}{\partial y}\right)^2\right) \frac{\partial^2 f_k}{\partial x^2} - 2 \sum_{r=3}^n \left(\frac{\partial f_r}{\partial x} \frac{\partial f_r}{\partial y}\right) \frac{\partial^2 f_k}{\partial x \partial y} + \left(1 + \sum_{r=3}^n \left(\frac{\partial f_r}{\partial x}\right)^2\right) \frac{\partial^2 f_k}{\partial y^2} = 0. \quad (1)$$

(1) を **極小曲面方程式系** (system of minimal surface equations) と呼ぶ。

\mathbf{R}^3 における極小曲面方程式

$n = 3$ のとき, $f_3(x, y)$ を $\Phi(x, y)$ とすると, (1) は

$$(1 + \Phi_y^2)\Phi_{xx} - 2\Phi_x\Phi_y\Phi_{xy} + (1 + \Phi_x^2)\Phi_{yy} = 0 \quad (2)$$

と 2 階の非線形楕円型偏微分方程式となる.

Note: 極小曲面方程式 (2) は, Φ の勾配 $\nabla\Phi := (\Phi_x, \Phi_y)$ を使って

$$\operatorname{div}\left(\frac{\nabla\Phi}{\sqrt{1 + |\nabla\Phi|^2}}\right) = \frac{\partial}{\partial x}\left(\frac{\Phi_x}{W}\right) + \frac{\partial}{\partial y}\left(\frac{\Phi_y}{W}\right) = 0 \quad (3)$$

($W := \sqrt{1 + \Phi_x^2 + \Phi_y^2}$) と発散を用いた方程式で表すことができる.

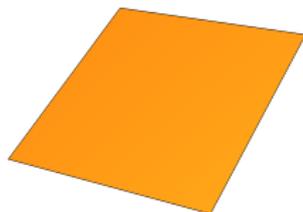
関数 Φ のグラフ

$$\Gamma_\Phi := \{(x, y, \Phi(x, y)) \in \mathbf{R}^3 \mid (x, y) \in \Omega\}$$

極小曲面方程式を満たす例

- 平面 (**plane**) (自明な例)

$$\Omega = \mathbf{R}^2, \Phi(x, y) = ax + by + c \quad (a, b, c \in \mathbf{R})$$



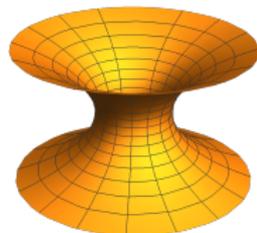
- 常螺旋面 (**helicoid**) (線織面かつ極小曲面となる唯一の例)

$$\Omega = \mathbf{R}^2 \setminus (0, 0), \Phi(x, y) = \arctan \frac{y}{x}$$



極小曲面方程式を満たす例と Bernstein の定理

- 懸垂面 (**catenoid**) (回転面かつ極小曲面となる唯一の例)
 $\Omega = \mathbf{R}^2 \setminus \{(x, y) \mid x^2 + y^2 < 1\}$, $\Phi(x, y) = \cosh^{-1} \sqrt{x^2 + y^2}$



Theorem (Bernstein の定理)

\mathbf{R}^2 全体で定義される極小曲面の方程式 (2) の解は、
自明な解 (ここでは, x, y の 1 次式のこと) のみである.

Note: 上の主張を幾何学的に述べると,
“ \mathbf{R}^2 全体で定義される極小グラフは平面のみである” となる.

S. N. Bernstein による証明について (1)

Serge Natanovich Bernstein (1880~1968)

- パリ大学で学位取得。C. E. Picard に師事。
- 学位論文で、楕円型偏微分方程式の問題である Hilbert の第 19 問題を解く (1904 年)。
- 専門は楕円型偏微分方程式，確率論，構成的関数論。

S. N. Bernstein による Bernstein の定理の論文

- S. Bernstein, Sur un théorème de géométrie et ses applications aux équations aux dérivées partielles du type elliptique, Comm. de la Soc. Math. de Kharkov (2^{ème} sér.) **15**, 38–45 (1915–1917).
- S. Bernstein, Über ein geometrisches Theorem und seine Anwendung auf die partiellen Differentialgleichungen vom elliptischen Typus, Math. Z. **26** (1927), 551–558. (上の論文のドイツ語訳)

S. N. Bernstein による証明について (2)

S. N. Bernstein は、以下の定理の系として Bernstein の定理を導いた。

Theorem (Liouville の定理の一般化, Bernstein (1915))

関数 $a(x, y), b(x, y), c(x, y)$ が次の条件を満たすものとする：

$$\begin{pmatrix} a(x, y) & b(x, y) \\ b(x, y) & c(x, y) \end{pmatrix} \text{ が各 } (x, y) \in \mathbf{R}^2 \text{ で正定値である.}$$

関数 $f \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$ を

$$\begin{cases} a(x, y)f_{xx} + 2b(x, y)f_{xy} + c(x, y)f_{yy} = 0 & \text{in } \mathbf{R}^2 \\ f(x, y) = o(\sqrt{x^2 + y^2}) & \text{as } \sqrt{x^2 + y^2} \rightarrow +\infty \end{cases} \quad (4)$$

の解とする。このとき、 f は定数関数となる。

Note: $a = c \equiv 1, b \equiv 0$ で f の有界性を仮定すれば、上の定理は調和関数に対する Liouville の定理となる。

S. N. Bernstein による証明について (3)

先の定理を用いて, Bernstein の定理を証明する.

Proof.

極小曲面方程式 (2) の任意の解は実解析である. また, (2) から,

$$\varphi_1 = \arctan(\Phi_x), \quad \varphi_2 = \arctan(\Phi_y)$$

は次の偏微分方程式の \mathbf{R}^2 上の有界な解となる :

$$(1 + (\Phi_y)^2)(\varphi_i)_{xx} - 2\Phi_x\Phi_y(\varphi_i)_{xy} + (1 + (\Phi_x)^2)(\varphi_i)_{yy} = 0 \quad (i = 1, 2).$$

そこで,

$$a(x, y) = 1 + (\Phi_y)^2, \quad b(x, y) = -\Phi_x\Phi_y, \quad c(x, y) = 1 + (\Phi_x)^2$$

として, 先の定理を適用することで, $\nabla\Phi = (\Phi_x, \Phi_y)$ は定数である. (4) における無限遠の挙動の仮定から, Φ は x, y の 1 次式となる. □

S. N. Bernstein による証明について (4)

Liouville の定理の一般化の結果の証明は次の通りである：
楕円型の条件 (4) から，

$$f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 \leq 0 \quad \text{in } \mathbf{R}^2$$

で，等号が成り立つのは $f_{xx} = f_{yy} = f_{xy} = 0$ となる点である。

Lemma (Bernstein (Gap 有) ; Hopf, Mickle (1950))

$f \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$ とする。 \mathbf{R}^2 上で $f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 \leq 0$ (つまり Γ_f の Gauss 曲率 K が $K \leq 0$) で， \mathbf{R}^2 のある点で $f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 < 0$ (つまり $K < 0$) となるとき， f は “ $\sqrt{x^2 + y^2} \rightarrow +\infty$ のとき $o(\sqrt{x^2 + y^2})$ となる” ことはない。

上の補題と条件 (4) から， \mathbf{R}^2 上で $f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 \equiv 0$ となり，

$$f_{xx} = f_{yy} = f_{xy} = f_{yx} = 0$$

となるので， f は x, y の 1 次式となる。

さらに無限遠の条件から f は定数関数となる。 □

Review : Cauchy の係数評価から Liouville の定理を導く

Theorem (Cauchy の係数評価)

$\Delta_R = \{z \in \mathbf{C} \mid |z| < R\}$ 原点中心半径 $R(> 0)$ の開円板
複素関数 $f(z)$ が Δ_R で正則 (*holomorphic*) かつ, $|f(z)| \leq M$ (M は定数) となるとき

$$|f'(z)| \leq \frac{M}{R}$$

となる.

Corollary (Liouville の定理)

$f(z)$ は \mathbf{C} で正則でかつ有界ならば, 定数関数である.

Proof.

$R \rightarrow +\infty$ とすることで, \mathbf{C} で $f' = 0$ となることがわかる.
よって, f は定数関数である. □

E. Heinz による証明について (1)

Ref.

- E. Heinz, Über die Lösungen der Minimalflächengleichung (German), Nachr. Akad. Wiss. Göttingen. Math.-Phys. Kl. Math.-Phys.-Chem. Abt. 1952 (1952), 51–56.
- R. Osserman, A survey of minimal surfaces, Second edition, Dover Publications, Inc., 1986.
- W. Jäger, S. Friedrich, Professor Dr. Dr.h.c. Erhard Heinz (1924–2017) in memoriam (German), Jahresber. Dtsch. Math.-Ver. **122** (2020), 3–33.

Erhard Heinz (1924～2017)

- ゲッティンゲン大学で学位し，在籍する． Franz Relich に師事．
- 専門は楕円型偏微分方程式，微分幾何学．

E. Heinz による証明について (2)

Theorem (Heinz, 1952)

$\Delta_R = \{(x, y) \in \mathbf{R}^2 \mid x^2 + y^2 < R^2\}$ 原点中心半径 $R(> 0)$ の開円板
 Δ_R 上で定義される極小曲面

$$\Gamma_\Phi = \{(x, y, \Phi(x, y)) \mid (x, y) \in \Delta_R\}$$

のガウス曲率 K に対して, ある正の定数 C_0 が存在して

$$|K| \leq \frac{C_0}{R^2}$$

が成り立つ.

- $R \rightarrow +\infty$ とすれば, Bernstein の定理が成り立つ.
- Heinz は $C_0 = 4\pi^3/3$ で証明する. Finn と Ossermann (1964) により $\pi^2/6 < C_0 < 6$ まで改良される.

\mathbf{R}^3 の CMC グラフに対する Bernstein 型の定理 (1)

Ref.

- E. Heinz, Über Flächen eindeutiger Projektion auf eine Ebene, deren Krümmungen durch Ungleichungen eingeschränkt sind. (German) Math. Ann. **129** (1955), 451–454.
- 剣持勝衛, 曲面論講義 平均曲率一定曲面入門, 培風館, 2000 年.

関数 Φ のグラフ $\Gamma_\Phi := \{(x, y, \Phi(x, y)) \in \mathbf{R}^3 \mid (x, y) \in \Omega\}$ の平均曲率 H

$$H = \frac{1}{2} \operatorname{div} \left(\frac{\nabla \Phi}{\sqrt{1 + |\nabla \Phi|^2}} \right) = \frac{1}{2} \left\{ \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{\Phi_x}{W} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{\Phi_y}{W} \right) \right\}$$

(ただし, $W := \sqrt{1 + \Phi_x^2 + \Phi_y^2}$) と発散形で表すことができる.

Corollary (CMC グラフに対する Bernstein 型定理)

\mathbf{R}^2 全体で定義される \mathbf{R}^3 の平均曲率一定グラフは平面のみである.

\mathbf{R}^3 の CMC グラフに対する Bernstein 型の定理 (2)

Theorem (Heinz, 1955)

$\Delta_R = \{(x, y) \in \mathbf{R}^2 \mid x^2 + y^2 < R^2\}$ 原点中心半径 $R (> 0)$ の開円板 $\Phi \in C^2(\Delta_R, \mathbf{R})$ で, Γ_Φ の平均曲率 H が, ある正の数 α に対して, Δ_R 上で

$$|H| \geq \alpha > 0$$

を満たすならば,

$$\alpha \leq \frac{1}{R}$$

が成り立つ.

Proof.

Heinz の定理から, $|H| \leq R^{-1}$ が成り立つので, $R \rightarrow +\infty$ とすると $H \equiv 0$ となり, Bernstein の定理から主張を得る. □

Heinz の定理の証明

この定理の証明では幾何学と微積分学とが見事に融合している。

剣持勝衛「曲面の微分幾何」 in 「可視化の技術と現代幾何学」より

$0 < R_1 < R$ を満たす任意の R_1 を取る。Green の定理より

$$\iint_{\Delta_R} 2H \, dx dy = \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left(-\frac{\Phi_y}{W} dx + \frac{\Phi_x}{W} dy \right).$$

必要ならば法ベクトルを取り換えることで $H \geq \alpha > 0$ としてよい。

上式の左辺は (左辺) $\geq 2\alpha\pi R_1^2$ を得る。

一方、右辺は Cauchy-Schwarz の定理より

$$\begin{aligned} \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left(-\frac{\Phi_y}{W} dx + \frac{\Phi_x}{W} dy \right) &\leq \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \sqrt{\frac{|\nabla\Phi|^2}{1+|\nabla\Phi|^2}} (dx^2 + dy^2)^{1/2} \\ &\leq \oint_{x^2+y^2=R_1^2} (dx^2 + dy^2)^{1/2} = 2\pi R_1. \end{aligned}$$

よって、 $2\alpha\pi R_1^2 \leq 2\pi R_1$ が成り立つので、 $R_1 \rightarrow R$ で定理を得る。

□

Part 2 : Lorentz-Minkowski 空間のグラフ曲面の話

$\mathbf{R}_1^3 = (\mathbf{R}^3, \langle \cdot, \cdot \rangle_L)$: 3次元 Lorentz-Minkowski 空間

Lorentz 計量

$(x_1, y_1, z_1), (x_2, y_2, z_2) \in \mathbf{R}^3$ に対し

$$\langle (x_1, y_1, z_1), (x_2, y_2, z_2) \rangle_L := x_1x_2 + y_1y_2 - z_1z_2.$$

空間的・時間的はめ込み

$\Omega \subset \mathbf{R}^2$: 領域

はめ込み $X: \Omega \rightarrow \mathbf{R}_1^3$ が

- **空間的** (space-like) $\iff X$ による誘導計量が Ω 上で Riemann 計量
- **時間的** (time-like) $\iff X$ による誘導計量が Ω 上で Lorentz 計量

\mathbf{R}_1^3 の極大グラフ

Definition

$X: \Omega \rightarrow \mathbf{R}_1^3: C^r$ 級空間的はめ込み ($r \geq 2$)
曲面 $X(\Omega)$ の平均曲率が恒等的に 0 となるとき,
その曲面を **極大曲面** (maximal surface) と呼ぶ.

非径数表示 (non-parametric form)

$$X(x, y) = (x, y, \Psi(x, y)), \quad \Psi(x, y) \in C^2(\Omega, \mathbf{R}).$$

X が空間的はめ込み $\Leftrightarrow 1 - |\nabla\Psi|^2 > 0 \Leftrightarrow |\nabla\Psi| < 1$.

\mathbf{R}_1^3 の空間的グラフ

$$\Gamma_\Psi = \{(x, y, \Psi(x, y)) \mid (x, y) \in \Omega\}$$

が極大曲面となる条件は

$$(1 - \Psi_y^2)\Psi_{xx} + 2\Psi_x\Psi_y\Psi_{xy} + (1 - \Psi_x^2)\Psi_{yy} = 0. \quad (5)$$

この方程式を **ZMC 方程式** と呼ぶ.

Calabi-Bernstein の定理

Ref.

- E. Calabi, Examples of Bernstein problem for some nonlinear equations, Proc Symp. Pure Appl. Math. 15, 223–230 (1968).
- S. Akamine, M. Umehara, K. Yamada, Improvement of the Bernstein-type theorem for space-like zero mean curvature graphs in Lorentz-Minkowski space using fluid mechanical duality, Proc. Amer. Math. Soc. Ser. B 7, 17–27 (2020) .

Theorem (Calabi-Bernstein の定理)

$\Psi(x, y) \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$ で, $|\nabla\Psi| < 1$ かつ ZMC 方程式を満たすならば, Ψ は x, y の 1 次式である.

Note : 上の主張を幾何学的に述べると,
“ \mathbf{R}^2 全体で定義される \mathbf{R}_1^3 の極大グラフは空間的平面のみである” となる.

Calabi 対応 (流体力学的双対性) (1)

$\Omega \subset \mathbf{R}^2$: 単連結領域とする.

Theorem (Calabi 対応 (流体力学的双対性))

- $\Phi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$: 極小曲面の方程式 (2) を満たす.
このとき, 定数の差を除いて定まる $\Psi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$ で

$$\begin{pmatrix} \Psi_x \\ \Psi_y \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{1 + \Phi_x^2 + \Phi_y^2}} \begin{pmatrix} -\Phi_y \\ \Phi_x \end{pmatrix}$$

かつ, ZMC 方程式 (5) と $|\nabla\Psi| < 1$ を満たすものが存在する.

- $\Psi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$: ZMC 方程式 (5) と $|\nabla\Psi| < 1$ を満たす.
このとき, 定数の差を除いて定まる $\Phi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$ で

$$\begin{pmatrix} \Phi_x \\ \Phi_y \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{1 - \Psi_x^2 - \Psi_y^2}} \begin{pmatrix} \Psi_y \\ -\Psi_x \end{pmatrix}$$

かつ, 極小曲面方程式 (2) を満たすものが存在する.

これらの対応は, 一方が他方の逆対応を与える.

Calabi 対応（流体力学的双対性）（2）

Calabi-Benstein の定理の証明

Ψ に対して，Calabi 対応から極小曲面の方程式を満たす $\Phi \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$ が存在する．極小曲面の Bernstein の定理から Φ は x, y の 1 次式となるので，Calabi 対応から $\nabla \Psi$ は定数となる．よって，主張が示せる．

Note : Bers による Calabi 対応の流体力学的意味付け

Chaplygin 流体を考えたとき， Φ が速度ポテンシャルに対し， Ψ は流れ関数が対応する．このことから，Calabi 対応は「流体力学的双対性」とも呼ばれている（Akamine-Umehara-Yamada, 2020）

Calabi 対応 (流体力学的双対性) (3)

Calabi 対応の証明

Φ が極小曲面方程式を満たすことから

$$\operatorname{div}\left(\frac{\nabla\Phi}{\sqrt{1+|\nabla\Phi|^2}}\right) = \frac{\partial}{\partial x}\left(\frac{\Phi_x}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}}\right) + \frac{\partial}{\partial y}\left(\frac{\Phi_y}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}}\right) = 0$$

が成り立つ。これは 1 次微分形式

$$\omega = -\frac{\Phi_y}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}} dx + \frac{\Phi_x}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}} dy$$

が閉形式であることと同値である。

Poincaré の補題から、 $d\Psi = \omega$ となる $\Psi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$ が存在する。
 Ψ が ZMC 方程式 (5) と $|\nabla\Psi| < 1$ を満たすことが容易にわかる。

□

\mathbf{R}_1^3 の空間的 CMC グラフ

Ref.

A. Honda, Y. Kawakami, M. Koiso, S. Tori, Heinz-type mean curvature estimates in Lorentz-Minkowski space, to appear in Revista Matemática Complutense, Open Access.

空間的グラフ $\Gamma_\Psi := \{(x, y, \Psi(x, y)) \in \mathbf{R}_1^3 \mid (x, y) \in \Omega\}$ の平均曲率 H

$$H = \frac{1}{2} \operatorname{div} \left(\frac{\nabla \Psi}{\sqrt{1 - |\nabla \Psi|^2}} \right) = \frac{1}{2} \left\{ \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{\Psi_x}{W} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{\Psi_y}{W} \right) \right\}$$

(ただし, $W := \sqrt{1 - |\nabla \Psi|^2} = \sqrt{1 - \Psi_x^2 - \Psi_y^2}$) と発散形で書ける.

\mathbf{R}_1^3 の平均曲率一定グラフに対しては,

Bernstein の定理の主張はそのままでは成り立たない.

実際, 後で述べる「双曲面 (hyperbola)」など反例が存在する.

Theorem (Honda-K-Koiso-Tori, 2021)

$\Delta_R \subset \mathbf{R}^2$: 原点中心半径 R の開円板, $\Psi \in C^2(\Delta_R, \mathbf{R})$.
このとき,

$$\frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1-|\nabla\Psi|^2}} \leq M(x^2 + y^2)^k \quad (6)$$

となる $M > 0$ と $k \in \mathbf{R}$ が存在し, Γ_Ψ が空間的であるとする.
 Γ_Ψ の平均曲率 H が, ある正の数 α に対して, Δ_R 上で

$$|H| \geq \alpha > 0$$

を満たすならば,

$$\alpha \leq MR^{2k-1}$$

が成り立つ.

Heinz 型の平均曲率の評価の証明について

$0 < R_1 < R$ を満たす任意の R_1 を取る. Green の定理より

$$\iint_{\Delta_R} 2H \, dx dy = \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left(-\frac{\Psi_y}{W} dx + \frac{\Psi_x}{W} dy \right).$$

必要ならば法ベクトルを取り換えることで $H \geq \alpha > 0$ としてよい.
上式の左辺は (左辺) $\geq 2\alpha\pi R_1^2$ を得る.

一方, 右辺は (6) と Cauchy-Schwarz の定理より

$$\begin{aligned} \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left(-\frac{\Psi_y}{W} dx + \frac{\Psi_x}{W} dy \right) &\leq \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1-|\nabla\Psi|^2}} (dx^2 + dy^2)^{1/2} \\ &\leq MR_1^{2k} \oint_{x^2+y^2=R_1^2} (dx^2 + dy^2)^{1/2} \\ &= 2\pi R_1^{2k+1}. \end{aligned}$$

よって, $2\alpha\pi R_1^2 \leq 2R_1^{2k+1}$ が成り立つので, $R_1 \rightarrow R$ で定理を得る.

□

平面上のグラフ曲面の平均曲率の消滅定理

Corollary (Honda-K-Koiso-Tori, 2021)

平面 \mathbf{R}^2 上で定義された C^2 級関数 $\Psi(x, y)$ のグラフ Γ_Ψ が空間的で、 Γ_Ψ の平均曲率が一定であるとする。 \mathbf{R}^2 上で

$$\frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1-|\nabla\Psi|^2}} \leq M(x^2 + y^2)^{(1/2)-\varepsilon}$$

を満たす $M > 0$ と $\varepsilon > 0$ が存在するとき、 Γ_Ψ の平均曲率は 0 となる。

Proof.

Heinz 型の平均曲率の評価の結果から、 Δ_R 上で Γ_Ψ の平均曲率 H は $|H| \leq M/R^{2\varepsilon}$ を満たす。 $R \rightarrow \infty$ とすることで $H \equiv 0$ を得る。 \square

勾配条件の幾何学的解釈

グラフ曲面 Γ_Ψ が空間的であるとき,

$$\nu(= \nu(x, y)) = \frac{1}{\sqrt{1 - |\nabla\Psi|^2}}(\Psi_x, \Psi_y, 1)$$

は Γ_Ψ の時間的単位法ベクトル場となる.

$e_3 = (0, 0, 1) \in \mathbf{R}_1^3$ も時間的ベクトルとなるので,

$$\langle \nu, e_3 \rangle_L = -\cosh \theta$$

を満たす非負値関数 $\theta(= \theta(x, y)) \geq 0$ が一意的に定まる.

この θ を, ν と e_3 の間の**双曲的角度** (hyperbolic angle) という.
このとき

$$\sinh \theta = \frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1 - |\nabla\Psi|^2}}$$

が成り立つ.

CMC グラフに対する Bernstein 型定理

Theorem (Honda-K-Koiso-Tori, 2021)

平面 \mathbf{R}^2 上で定義された空間的グラフ Γ_Ψ の平均曲率が一定で、 ν と e_3 の間の双曲的角度 θ に対して、 \mathbf{R}^2 上で

$$\sinh \theta \leq M(x^2 + y^2)^{(1/2)-\varepsilon} \quad (*)$$

となる $M > 0$ と $\varepsilon > 0$ が存在するとき、 Γ_Ψ は空間的平面となる。

Proof.

先の系（消滅定理）と双曲的角度の性質から、仮定を満たせば平均曲率は 0 となる。

よって、Calabi-Bernstein の定理から結果が従う。 □

Bernstein 型定理の最良性

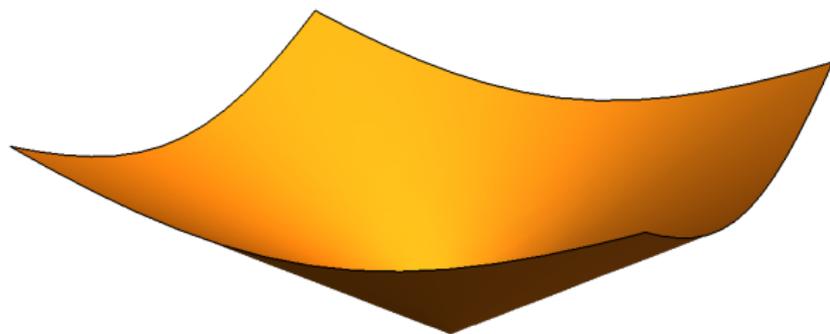
先の系の結果は最良 (optimal) である. 実際,

$$\Psi(x, y) = \sqrt{x^2 + y^2 + \frac{1}{H^2}} \quad (H > 0)$$

のグラフ曲面となる双曲面 (hyperboloid) は,
 \mathbf{R}^2 上で定義される平均曲率一定 (H となる) グラフで,

$$\sinh \theta = H(x^2 + y^2)^{1/2}$$

つまり, (*) の $\varepsilon = 0$ の場合となる.



- \mathbf{R}^3 の極小グラフに対する Bernstein の定理の証明は色々と知られており、その根底にあるのは Liouville の定理との対応である。
- \mathbf{R}^3 の CMC グラフに対する Bernstein 型定理は、Heinz の平均曲率の評価から導くことができる。
- Calabi-Bernstein の定理は、 \mathbf{R}^3 の極小グラフと \mathbf{R}_1^3 の極大グラフの対応から示すことができる。
- \mathbf{R}_1^3 の空間的グラフ曲面に対して、関数のある種の勾配評価を仮定することで、Heinz 型の平均曲率の評価が成り立ち、その系として、 \mathbf{R}^2 上の CMC グラフの Bernstein 型定理を得ることができる。またその結果は最良である。